

電車が運ぶ
恋がある。



いつも乗る電車、前から三両目の車両。そこに彼は乗っていた。
いつもピシッと着こなしているスーツがくしゃくしゃな日もあれば、
分厚い資格試験の参考書を広げている日もあった。

もちろん、声をかけたことはない。
それでも毎日のように見かけるうちに、恋に落ちていた。彼を見かけ
るようになってから一年の時間が過ぎていた。
(今日も、乗ってるのかな)

見まわした車両の中、嬉しそうな顔でスマートフォンを見ている彼の
笑顔があった。私まで、嬉しくなるような笑顔。ふと見えてしまった画面
には、生まれたばかりの赤ちゃんを抱く女の人の写真があった。

叶った恋だけが、恋なわけじゃない。ふわり、温かい気持ちをくれた恋
に、彼にありがとう。と心の中で呟いて、電車を降りた。

学校帰り

今日も部活、お疲れさま。高校生の頃、駅のホームで彼を待つのが日課になっていた。

付き合い始めてからしばらくの間は、照れくさくて、駅で待ち合わせにしよう。って言ってたけど、最近は座って待つことが出来るのもいいなあって思うようになった。

彼が来るまでの時間、今日は何を話そう。なんて考えていた時もあったけど、今では何も話さなくても、一緒にいられる時間を幸せだと思うようになっていた。

受験が近づいてきて、部活も引退が近づいた頃彼が視線を合わさずに、ぽつりぽつりと言葉を選ぶように言った言葉。

「ごめん、俺達、別れよう」

野球の強豪校に行きたい。そう言っていた彼の進路は学生には遠すぎる距離。少し前から、そんな予感はしていた。

「そっか……。今までありがとう」

帰りは別々の電車に乗った。涙が溢れて、止まらなかった。

あの頃の思いは、今では良い思い出になっているけれど、今でも大切な宝物。電車の匂いが、たまに思い出させる切なさも、今では恋の一部だと思える。

球場からの帰り道

「いつもありがとう」

笑顔で言ってくれる彼の笑顔が見ただけで何度も何度も通った、野球場。

いつも一緒に遊んでいた幼馴染のお兄ちゃんは、いつのまにか遠い存在になっていた。小さい頃から野球が好きで、大好きで。

そんな彼の後ろを追いかけていた私は、女の子が野球をするなんて変だよ。という小学校の友達の言葉に傷ついて泣いたこともあった。

「そんな気にすんな」

大きな手で頭をがしがしと撫でてくれた時、嬉しくて、照れくさくて、ありがとうじゃなくて、痛いよとしか言えなかった。

今でこそ女子のプロ野球もあるけれど、まだまだ一般的ではなかった小さい頃。私は野球を諦め、彼の後ろを追いかけることも諦めてしまった。

たまには見に来いよ。久しぶりに会った私に、そう言ってくれたお兄ちゃん言葉。

半ば面倒くさそうなフリをして、行けたら行くねって言ったけど。本当は嬉しくてたまらなかった。

「そんな試合を諦めてるヤツ、変えてしまえ！」

客席では、彼のプレーに対する野次を聞いた。誰よりも頑張っている彼のことを、何も知らない人にけなされた気持ちになって、悲しかった。

その試合は、負けてしまったけれど。

「良かったら、また来いよ」

それでも言ってくれた彼の言葉に、引きずられるように何度も足を運ぶようになっていた。

遠く、輝く人。手が届かないくらい、遠くの存在のはずなのに、いつのまにか、恋心が甦っていた。

（追いかけても、届かないくらい遠くまで行っちゃったね）

これで最後にしよう。試合終了間際で出てきた球場を背に、そう思った。乗りこんだ電車の中、いつのまにか眠ってしまったらしい。携帯にメールが届いていた。

「今日もありがとう。お前が来てくれていると頑張れる気がする」

追いかけているだけの恋。だけど、ほんの少し前で立ち止まって待っていてくれている。それが分かっただけでも嬉しかった。

この恋を追いかけて、どこまでも。

走る電車の窓から見える風景が、いつもと少し違って見えた気がした。

「俺のこと、好きなのか分からへん。ごめん、今週末はこっち来なくてええで」

昨日の晩、携帯電話を開いていつものフォルダを見ると、別れを匂わすメールが来ていた。取り乱すことなく、いつも通り仕事を終わらせて、電車の中で改めて読んでみると、きっと向こうは苦しんだんだろうな。と、分かった。

だから、分かった。と言っただけ、書いたメールを送った。

遠距離恋愛で数年間付き合っていた男から、その言葉を告げられた時に思ったのは、悲しみより安堵だったように思う。

（ごめん、私も頑張るから。とか言える健気さが必要やったんかな）

大阪から引っ越してきて数年。仕事は楽しいし、友人もそこそこできた。それなりのストレスと折り合いをつけながら、日々をこなしている。

（学生でもあるまいし、恋だけに全力投球できるわけないやん）

頑張ってきた、つもりだった。新幹線を使ってばかりもいられなかったから、夜光バスで行き来したり。仕事を持って行って、彼が寝たのを見計らって、夜中に仕上げたこともあった。

彼は「自分を支え、尽くしてくれる女の子」が欲しかった。それは分かった。

仕事にのめり込めばのめり込むほど、私たちの心の距離は広がっていった。

ショックがなかったわけじゃない。

でも、頭のどこかには既に仕事のことがある。ただ、完全に仕事にかかりきりになれないところもあった。

（手につかない。まではいかなくても、傷つくくらいには好きだったんだな）

私が幸せにしてあげられなかった分、誰かに幸せにしてもらって欲しい。私は恋が全てには、なれなかった。

ふと顔を上げると目の前にひとつだけ、あいた席。疲れた顔をした、隣に立つサラリーマンと目線で譲り合う。

「どうぞ、僕は大丈夫ですから」

柔らかな声に導かれるように座ると、ふっと気が抜けた。下を向くと、ぽつりと涙が手のひらに落ちる。せきを切ったように流れ落ちる涙を、周りから隠すように髪の毛がさらりと顔を覆う。

（終わっちゃったなあ）

涙を拭きながら、うつむいたまま。

電車はそれでも私たちを運んでいく。明日も、明後日もきっと。

いつのまにか着いた最寄り駅。真っ直ぐ視線を上げ、背筋をぴんと伸ばす。扉が開き、私も一歩を踏み出した。

きっといつか思い出す、未来の自分のために、頑張ろう。そう素直に思えた。

「俺のこと、好きなのか分からへん。ごめん、今週末はこっち来なくてええで」
送ってから、何度も何度も後悔した。頭を抱えて、どうしたら彼女の負担にならずに済むか考えた結果。彼女に来てもらうんじゃなくて、自分が行くことを考えた。

「あ〜〜〜〜！！なんであんなこと書いてしまったんやろ」
ただいつも一生懸命な彼女に嫉妬してたことも、今では冷静に考えられる、そんな感情も。
全て彼女の中では終わったこととして処理されているのだろう。すぐに返って来たメール、
分かった。って何が分かってん。俺の何を分かったっていうねん。
「うっさいねん、お前。伝えてないねんから、分かるわけないやろ」
すぐ後ろで同僚が呟く。どうやら声に出てしまっていたらしい。彼女が来る時には、時間を
空けようと必死で案件を片付け、時間を作り、彼女が仕事を持ってきたと分かった日にはわざと
早めに寝たりして。

色々と相談してきた、同僚だった。
「好きなのか分からへん、なんて書かれたら。自分やったら絶縁宣言一步手前やと思うわ」
「拗ねた彼氏の、ちょっとした言葉とは……」
「思われへんやろうな。彼女さん、モテはるんやろ？多分、今頃誰か一緒に失恋を慰めてくれる
人と飲んでるわ」

にやり、笑って言う同僚の意図がどこにあるかは分かっていたけれど。
「ちょっと帰るわ」
「最終の新幹線やったら、今から急いだら間に合うよ」
「ありがとう、お前のそういうところ好きやわ」
駅へと走る。彼女の家住所は知っている。後は彼女が受け入れてくれるかどうか、だけだ。
もう冬を感じさせるような冷たい風が頬を撫で、背中を押してくれる。
週末でもないのに、会いに行ったら迷惑かもしれない。色々と冷静になった新幹線の車内。
デッキで電話をすると、ばかじゃないの。という涙声の彼女が、そっと待ってるからと
付け足してくれた。